当科における川崎病登録例の学童以上の実態

（分担研究：川崎病のサーベイランスに関する研究）

馬場　清，　馬渡英夫，　豊原啓子，　水戸守寿洋，
田中陸男

要約：昭和52年から平成4年までの16年間に，当院の病名登録データ・ベースに，川崎病として登録され，平成4年12月31日の時点で学童以上に達した症例は625名であった。小学生は221名，中学生188名，高校生106名，高卒以上は110名であった。冠動脈造影検査上冠動脈障害を認めた例は，全体で108名（17.3％）で，服薬を継続している例は，23名（3.7％）であった。紹介患者が多く，1回のみ（検査入院を含む）の受診例が239名であったが，問題例のドロップ・アウトは4例のみであった。

見出し語：川崎病，冠動脈障害，冠動脈瘤

川崎病に罹患した子供達の予後は，一般的には心後遺症，とりわけ冠動脈障害の程度に左右されていると考えられる。しかし，巨大な冠動脈瘤あるいは多発性冠動脈瘤を有する例は予後が良くないと判明しているものの，個々の冠動脈障害の経過は多様であることも事実である。したがって，川崎病既往児の管理も，後遺症の程度およびその経過に見合ったものが要求されるべきであろう。ところが，学校における管理が実際にどうなっているかは，いまだ十分に把握されていないように思われる。また，地域，学校によっても，まちまちの管理がされているように思われる。そこで，その実態を調査することを目的に，その手掛りとして，

当院に登録されている川崎病既往児の学童以上の症例につき，カルテを中心に検討を加えてみた。

【対象および方法】

昭和52年から平成4年までの16年間に，当院の病名登録データ・ベースに，川崎病として登録された症例は，625名であった。これらの症例を，小学生，中学生，高校生，高卒以上（平成4年12月31日の時点）に分類した。それぞれのグループで，冠動脈障害を有する例，服薬を継続している例，経過観察年数などを，カルテの記載をもとに調べた。冠動脈障害ありの判断は，冠動脈造影検査で確認された例に限り，心エコー図上の一過性拡大の例は

倉敷中央病院　小児科：Department of Pediatrics, Kurashiki Central Hospital

含めなかった。

【結　果】

表1：総登録者数は625名で，小学生が221名，中学生188名，高校生106名，高卒以上が110名で，中学生の比率が高かった。冠動脈障害のあった例は，小学生が53名（24.0％），中学生が38名（20.2％），高校生が10名（9.4％），高卒以上が7名（6.4％）で，低学年ほど冠動脈障害例の比率が高い傾向を示した。現在も服薬している例は，小学生11名，中学生9名，高校生2名，高卒以上1名であった。とくに要注意とされる例は，小学生では，ACバイパス術後例が1名，閉塞を起こしている例が3名，狭窄を有する例が2名であった。このうち2名には，冠動脈瘤の石灰化が認められた。中学生では，閉塞例が4名，狭窄例が1名で，3名に石灰化像の所見が認められた。高校生では，閉塞例が1名，狭窄例が1名で，2名に石灰化を認めた。高卒以上では，石灰化を有する例が1名であった。死亡の1例は，三枝にわたる巨大冠動脈瘤が存在し，ACバイパスの適応外と判定され，服薬は継続していたが，高校卒業後に突然死した。

表2：カルテの記録をもとに，当科で何年間経過が観察されているかを示したものである。1回のみ，あるいは検査入院のみの例は，経過観察年数を0年とし，239名ともっとも多かった。このうち冠動脈障害を有する例は，計18名であった。18名のうち3名（小学生1名，中学生1名，高校生1名）は，他院での経過観察からもドロップ・アウトしており，服薬の継続が望ましいと考えられる問題症例であった。経過観察1～5年の例は，合計184名で，冠動脈障害例が30名であった。このうち小学生の1名が，服薬が必要と判断されるにもかかわらず，ドロップ・アウトしていた。経過観察年数が6年以上の例は，ほとんどの例が定期的に当院でチェックを受けていた。しかし，高卒以上の例で，冠動脈障害のない例は，大半は，就職とか大学卒業などの機会に，どこかでチェックを受けるよう説明した後，小児科での経過観察を打ち切っていた。冠動脈障害のある例は，小児科での経過観察を希望している1名を除き，3名は内科（循環器科）に紹介し，経過観察を続けるように説明していた。

【考　案】

今回は，カルテの記載を中心に検討した結果を報告したが，登録者の中で，中学生の比率が高かったのは，流行年に発症した症例が，中学生に集中したためと考えられた。冠動脈障害例が低学年ほど多い傾向を示したのは，心エコー図検査を施行できる施設が増え，冠動脈に異常を認めた症例の紹介が増加したためと考えられる。現在も服薬を継続している例が23名もあり，この中に生活管理上厳重な注意が必要な例が含まれているので，さらに学校での管理の実際，患児や家族の病気に対する認識などを調査する必要があるものと考えられた。経過観察年数は，紹介患者数が増加していることもあって，1回のみ，あるいは検査入院のみの例が，もっとも多かった。しかし，服薬が望ましいと判断される症例の中で，ドロップ・アウトしたと考えられる例は，4名のみであったが，今後のことを考えると，改めて追跡する必要があるものと考えられた。今後さらに，学校における管理の実際，患児・家族の対応などの調査を行う予定である。

表1. 川崎病登録データー

	登録者数	冠動脈障害あり	服薬あり	その他
小学生	２２１	５３(24.0%)	１１	ACバイパス　1 Obst 3 St 2, Calc 1
中学生	１８８	３８(20.2%)	９	Obst 4 St 1 Calc 3
高校生	１０６	１０(9.4%)	２	Obst 1 St 1 Calc 2
高卒以上	１１０	７(6.4%)	１ (死亡 1)	Calc 1
計	６２５	１０８(17.3%)	２３	

Obst：閉塞, St：狭窄, Cacl：石灰化

表2. 経過観察年数

	０	１－５	６－１０	１１－
小学生	７３ (9)	８３(17)	６４(27)	１
中学生	７３ (3)	５１(12)	４６(14)	１８ (9)
高校生	３８ (3)	２２ (1)	３０ (2)	１６ (4)
高卒以上	５５ (3)	２８ (0)	２５ (4)	２ (0)
計	２３９(18)	１８４(30)	１６５(47)	３７(13)

(　　) 内は冠動脈障害例

0：1回のみの受診または検査入院のみ

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:昭和 52 年から平成 4 年までの 16 年間に,当院の病名登録データ・ベースに,川崎病として登録され、平成 4 年 12 月 31 日の時点で学童以上に達した症例は 625 名であった。小学生は 221 名,中学生 188 名,高校生 106 名,高卒以上は 110 名であった。冠動脈造影検査上冠動脈障害を認めた例は,全体で 108 名(17.3%)で,服薬を継続している例は,23 名(3.7%)であった。紹介患者が多く,1 回のみ(検査入院を含む)の受診例が 239 名であったが,問題例のドロップ・アウトは 4 例のみであった。